



# PipeLine

## 特集

# 教養科目

教養科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等



## No.55 Contents

|                             |      |
|-----------------------------|------|
| 特集「教養科目」                    | P1~9 |
| 共通教育自己点検・自己評価部会の活動          | P10  |
| 共通教育実施委員会からのお知らせ<br>退任に当たって | P11  |

# 特集 教養科目

「教養科目」授業の感想、意義、  
受講にあたってのアドバイス等

Part 1  
学生記者から

※学生記者の皆さんには、令和元年度第2学期に寄稿していただきました。

人文社会科学部  
人文社会科学科  
国際社会コース  
3年

金田 野乃花

## 「自分」を知る第1歩

私が教養科目を履修し、3年生の現在になって実感したことは、教養科目は、自分の興味・関心を探求する、入学後最初の機会だということです。

1年生の時、学問分野や授業数の豊富さ、履修方法の自由さから、いざどの授業を履修してよいかわからない、自分の興味のある学問がわからないという困難に直面する人もいるのではないかと思います。教養科目では、いくつかの条件のもと、自分の興味・関心があるもの、あるいはそうでないもの、全く未知の学問分野など、幅広い学問分野と授業に触れることができます。それを経て、より専門的に学びたい学問を絞り、次年度の学習に繋げていくための最初の機会になると思います。

私自身、入学初期は、自分の興味・関心がわからなかったため、授業内容や形態から、気になる授業を分野問わず履修しました。その結果、自分の興味・関心のある学問、逆にそう思わない学問も知ることができ、2年次、3年次の授業の履修や専攻学問の決定に役立てることができました。

多様な学問分野、授業に触れる中で自分の興味・関心を見つけて、それを次年度へと繋げていけるよう、有意義で実りある学びの場にしてほしいです。

人文社会科学部  
人文社会科学科  
国際社会コース  
2年

田中 凌生

教養科目を学ぶことは、人生において、ささやかな知識の豊かさを与えると思う。私は教養科目である、「渚の自然史」という授業を受講した。ここでの学びは、これから自身が専門として学んで行く分野とあまり関連はない。

しかし、私はこの授業を受講したいと思う理由があった。それは、バイト先への通勤の際に通る川沿いの道には、渚があったからである。授業を重ねるうちに、通勤の道がとても楽しいものに変化した。講義を受ける前には気が付かなかった、サワガニが道を横切るのに目が行く。この川にあるヨシ原にはどんな生物が存在するのだろうかと考えたりもした。講義を受けたことで、今までに気にも留めなかった、物事に目が行くことになった。私はこの点に教養科目の意義を感じる。

学年が上がるにつれて、自身の学びに専門性が高くなる。そこでは多面的なものの見方が必要となる。私は教養科目での幅広い学びが、将来的に多面的な視点を培う上で土台になると思う。1年生の皆さんは、幅広い分野をバランス良く、受講することをお勧めしたい。

教育学部  
学校教育教員養成課程  
3年

鈴木 健斗

## 教養科目の要素の一つとしてあるもの

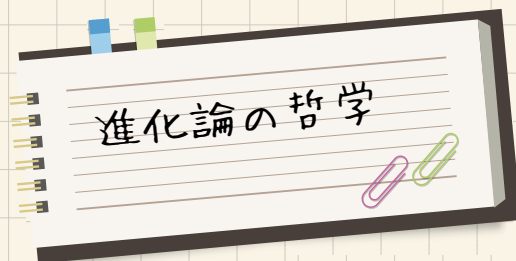
私は、教養科目には、現在の自分がどのような人間なのかを客観視できるツールの1つ、という要素があると考えています。それは「スポーツ科学実技(エアロビクス)」の授業を通して、それを強く考えさせられました。この授業で行われる運動は、歩く・腕を伸ばす・縮める、身体を捻るといった動きなので、見た目はあまりきつように見えませんが、実際に身体を動かすとなると、普段使わない筋肉が刺激されるので想像以上の疲労を感じます。私は、この身体の酷使された感覚を通じて、約20年間生きてきたが、自分の身体についてまだまだ知らない人間で、もっと運動しなければいけないと気づくことができました。

こういったように、授業を通して、自分の何かに気づきを与えてくれます。この気づきによって、現状の自分と他者の存在に差異が生じ、自分について客観視できるのです。この気づきは、初年次科目や専門分野でもあると思います。しかし、自分の所属する学部・学科以外の気づき、他分野での気づきを与えてくれるのが、教養科目の強みではないかと思います。

## 大学生としての学びの場

私は教育学部学校教育教員養成課程社会科教育コースに所属しており、普段であれば教育に関することと社会科教育に関することのどちらかを学んでいます。しかし、教養科目は自分の好きな分野をさらに特化させたり、自分の興味を持った新しい分野に手を出すことのできる数少ない機会です。そして、私はそれこそが学部生として自由に学べる特権であると思います。

私は数ある授業の中で『進化論の哲学』という講義を履修しました。進化論と哲学、ともに初めて学んだことであるが、たくさんのことが絡み合い、いつもと違った視点・論点で物事を捉えることができました。大学生とは、自分で学ぶことが全てだと思います。そして、学んだこと全てが、自分の頭の中を複雑に絡み合いながら作り上げていきます。自分の価値観を作る最初のステップとして、教養科目はとても大切な場であると思います。



## 『アインシュタインが残した言葉』

教養科目は受ける講義をある程度自由に選べるので、将来に役立つようなものや興味のあるものを選択すると思います。私もそうしてきました。まじめに講義を受けていたつもりですが、1年生の時に受けた講義の内容はあまり覚えていません。

アインシュタインの残した言葉に「教養とは、学校で学んだことをすべて忘れた後に残るものことです。」というものがあります。私はこの言葉の意味を、知識も大切だがそれよりも講義で学んだ内容で興味を持ったことについて本を読むことや、自分の専門分野と違う分野の考え方に触れることの方が大切だ、ととらえています。

講義を聞いても全くわからないことや、覚えたことを忘れてしまうことが多くあり、私は専門科目に比べてモチベーションは低かったですが、アインシュタインの言葉から、知識を取り込むことよりも自分のやりたいことを見つけるため、または興味の幅を広げるために頑張ろうと思いつつながら受講していました。

私の考え方が役に立つかはわかりませんが参考になれば幸いです。

理工学部  
数学物理学科  
物理科学コース  
3年

矢田 裕貴



理工学部  
地球環境防災学科  
3年

山岸 悠人

## 『教養科目の意義』

大学の講義には教養科目があります。自分の所属する学部学科の専門性とは関係のない分野を学ぶことになるので、必要ないのではないか、と感じる人もいるかもしれません。確かに、私も自分の学部の専門的な分野の授業を受けたいと考えていた時期はありましたが、今では逆の考えになりました。それは自分の学部の専門分野以外のことを学ぶことによって新たな発見があったからです。

自分の学びたい分野だけを学ぶことは、大学での学びにおいて理にかなっているように感じますが、専門外の分野（例えば理系の学生であれば文系の内容、文系の学生であれば理系の内容）を知ることによって、物の見方が広がることもあります。また、卒業して社会人になると自分の専攻している専門分野の知識や特性を生かして、他分野の人間とかかわっていくことが必要になってくると思うので、より知識の幅を増やすために大学の教養科目は重要であると私は考えます。

## 『お得という観点』

教養科目を受講する意義は何か。

ここで『自分の見識を広げる』などという、ふんわりとした目標を書くとうんざりする方もいらっしゃるだろうから、あえて言わないことにする。少なくとも入学当時の自分なら、耳にタコの状態だったから。

では、そのような題目を抜きにして“教養科目を受講する意義”を考えた時、真っ先に浮かんだのは『勿体ないから』だった。

考えてもみてほしい。教壇に立って講義を行うのは、少なくとも何かしらの分野において学を極めたとされる教員なのだ。当然、我々学生が知りえない情報や知識を持っている、得難い経験を積んでいることだろう。そんな相手から、決して安くはない学費と青春の4年間という貴重な時間を支払って、知を、経験を吸収する——それが大学における学びの本質ではないだろうか。何とも貴重な経験であり、むしろおざなりにすることや放棄することは『勿体ない』の一言に尽きると思うのである。

高知大学に入学した以上、卒業するためには指定された、または選択した教養科目の履修が必要不可欠である。『自分の見識を広げる』といった大層な目標も結構だが、『時間と投資の有効活用＝お得』といった俗っぽい観点から、履修登録や受講に臨むのもまた一つの手ではないだろうか。

## 『「教養」の海へ漕ぎだそう』

教養科目の学びにどんなイメージを抱いていますか？ 興味のない分野を学ぶ理由が分からない？ 正直面倒くさい？ そうですね、在学生からもそういった声がちらほら聞かれます。授業内容は各分野の入門レベルであるため単位修得自体は決して難しくないのですが、教養科目に意欲的な学生は少なく、楽に単位を取れるという噂によって授業を選ぶ人も多いようです。

ですが、教養科目が大好きな私からすると、なんてもったいないのだろーと思えます。もちろん、自分のやりたい専門的な学びを深めるために大学へ来ているのには違いありませんが、様々な分野の最先端の学識が集結しているのが大学というところ。無限の「知」という海原が目の前に広がっているのに、最初からわき目も振らず潜ってしまったのは、井の中の蛙のようなものです。

私は農学が専門ですが、農業に直接関係のある科目だけでなく、今後農業に生かせそうな経営やAIの授業、社会課題の解決を見据えた地域活性化や国際協力の授業、さらに専門の学びとは全く関係ないけれど個人的に興味のあった声楽の授業など、あちこちから知識を吸収しては自分の糧にしています。地域の人と仲良くなったのも海外でフィールドワークができたのも、教養科目の授業がきっかけです。



農林海洋科学部  
農林資源環境科学科  
2年

原 晃矩



農林海洋科学部  
農林資源環境科学科  
3年

陶山 智美

教養科目は決して寄り道ではありません。もし学ぶ意義がすぐには分からなくても、別の分野の学びが必ず自分の専門に生きてきますし、知識の引き出しがいくつもあったほうが後々面白いことになります。皆さんもぜひ、広大な海を自由に探索する気持ちで、様々な分野の学びに飛び込んでみてください。

医学部  
医学科  
1年

才原 悠太郎

## 医学概論

1年生の教養科目の中に「医学概論」というものがあります。1年生の授業は数理科学や大学英語入門など、医学的な内容に触れることが少ないのですが、この授業では2年生になってから先端医療学コースというコースで選べる研究班の教授が来てくださり、そこで何を研究しているのかを学ぶことが出来ます。医療に関する授業は医師を目指す者として、なくてはならないものです。また、医学に触れる授業というのも医学部ならではでありそれを学びたくてほとんどの人が医学部に入っているので、医師になる自覚が芽生える授業の1つだと思います。

この授業を通して、将来医療に携わる者としてより良い学習者としての第一歩が踏み出せるのではないのでしょうか。

医学部  
医学科  
1年

松岡 愛莉

## スポーツ科学講義

「スポーツ科学講義」はチーム基盤型学習法(TBL)の授業形式で行われ、講義内に配布されるスポーツ科学の資料に基づく課題の答えを班員で協力して考える授業です。TBLの授業形式の良い点は多くの人と意見交換が出来ることです。自分の意見を押し通すのではなく、周りの意見にも耳を傾け、より良い案を作っていく、このような作業は将来医療人になってからも必要になってくると思います。

また各ユニットの2回目の講義の初めに小テストがあり、個人テスト(iRAT)とチームテスト(tRAT)両方が成績に反映されます。このテストの点は個人だけでなくチーム全体の点数にも関わってくるため、配布される予習資料や講義資料の予習が重要となってきます。そのためこの授業は急速に発展する医療技術に遅れないために、生涯必要な自ら課題や予習に取り組む姿勢や力を身につけられます。

将来医療者として働くための基本となる力を得られるため、このような教養科目も真剣に取り組むべきだと思います。

## 社会に出るための基礎的素養を身につける

共通教育の授業は、学問の基礎を学ぶ時間になったなと感じています。また、大学を卒業して社会人になった際に、どこの学部を卒業したとしても、最低限つけておくべき社会の知識を学ぶことが出来ると考えています。私がすでに修得している授業としては、大学英語入門のような外国語の基礎授業・情報処理のようなインターネットリテラシーの基礎授業・大学基礎論のような協働活動の基礎を学ぶ授業等がありました。

それを踏まえた上で、共通教育の授業の中で一番記憶に残っているのは、学問基礎論の授業でした。この授業はグループワークで、日本の貧困と世界の貧困を比較していくような授業でした。毎回授業前に指定の教科書で予習をして、授業内では予習した内容をグループで話し合いして発表までするという流れになっていたため、情報収集力・状況判断力・関係性理解力・ファシリテーション力が身に付いた授業だったのではないかと考えています。

また、授業内で討論していた「絶対的貧困と相対的貧困の比較」は大学生における基礎知識にもなりましたし、貧困が見えにくい日本人だからこそ学ぶべき内容だったと感じています。とても興味深い内容の授業でした。



地域協働学部  
地域協働学科  
2年

春田 碧



地域協働学部  
地域協働学科  
2年

檜山 諒

## 学部での学びに役立つ教養

私は共通教育の授業を通して、学ぶことにつながりについて気づかされた。地域協働学部に在籍して学ぶ中で、専門科目は必然的に地域に関係するものが多くなる。一方で、私は共通教育の授業では心理学やメディア社会などの授業を履修した。一見すると、地域協働の学びから逸れているようだが、実際受けてみると、様々な場面で、共通教育の学びが活かせることに気づいた。

例えば心理学では、現地の方とコミュニケーションをとる際、どのように話せば内容を理解してもらえるか、といったことを実習の授業で学んだことだけでなく、共通教育での学びも活用することで、理論的補強をより深く行えるようになったと感じる。

一方で、共通教育は単純に「単位をとるため」に履修をするケースも多いように感じる。全面的に否定をするわけではないが、この授業から何を学び取り、どう生かしていきたいのか、という意識を持って授業に臨むことで、共通教育という幅広い学びは、私たちにとって非常に大きな糧となると思う。

土佐さきがけプログラム  
国際人材育成コース  
1年

國友 麻衣

## グローバルコミュニケーションを受講して

私はクアラルンプールにあるEMSという語学学校に4週間通いました。EMSでは一般英語コースもありましたが、交換留学を控えていることもありIELTS対策講座を選びました。授業は08:45から13:00（前半はWritingとSpeaking対策、後半はReadingとListening）までほぼ休憩なしであり、宿題も毎日かなりの量が出ました。授業のレベルは高い（受講要件がそもそもIELTS5.0以上）のですが、その分受講生のレベルも高く、よい刺激を受けました。

授業以外では、中国や韓国からのクラスメートとランチを食べたり買い物に行ったりするなど、英語圏以外の文化に触れる機会もありいい経験になりました。グローバルコミュニケーションでは出発前に渡航手続きや現地での生活準備など丁寧に指導してくれるので、知らない土地でも安心して1ヶ月間過ごすことができました。短期集中で英語を学びながら、いろいろ経験も積むことができるのでおすすめな科目です。帰国前日に現地で受験したIELTSはちゃんとスコアが上がっていました！

土佐さきがけプログラム  
国際人材育成コース  
1年

棚田 陽香

## グローバルコミュニケーションを受講して

私も國友さんと同じくEMSに通いました。国教がイスラム教という事もあって、語学学校の生徒もイスラム圏出身者が多いように感じました。イスラム教の事を少しでも知ろうと滞在中に市内のモスクを訪問しました。日本の簡素な神社仏閣とは違い、豪華な内装と装飾には驚きました。また毎週金曜日のお昼に大勢の男性が礼拝所に集う姿は圧巻でした。宗教による食文化の違いも強く印象に残っています。豚肉を使わない代わりにチキンやラム肉を中心に香辛料で辛く味付けされた料理が多くみられました。多民族国家であるため、マレー料理以外にもインドや中華がどこにでもあります。

今回が初海外だったので少し不安もありましたが、日々の英語学習と多様な文化に圧倒されている間に一瞬で終わった1ヶ月でした。IELTSスコアが上がったのはもちろん嬉しかったのですが、高知で暮らしているとほとんど触れることのない異文化を体験できるのもこの科目の魅力の一つだと思います。





# 教養科目

「教養科目」授業の感想、意義、  
受講にあたってのアドバイス等

Part 2  
教員から



人文社会科学部

津野 倫明

## 歴史を考える

この授業の目的は日本の室町時代とくに中後期の政治史に関する先行研究を参考にし、当時の史料にもとづいて当時の「人」と「政治」について考えることです。ここでいう「人」は朝廷の上皇・天皇・親王や室町幕府の将軍・有力守護大名などで、「政治」は皇位継承や幕府の政策決定などにかかわる交渉・合議です。

先行研究とはすでに発表されている著書や論文のことで、授業ではおもに桜井英治『室町人の精神』（講談社、初出2001年、2009年に文庫版化）を参考にします。著者の桜井氏は日本史学界を代表する研究者です。同書は概説書として一般向けに書かれていますが、上記の「人」や「政治」を見事に叙述しているので研究者の間でもきわめて高く評価されています。そうならば、この著書を読むだけで歴史を考えることになると思うかもしれません。

しかし、日本史学などの文献史学という学問では、文字によって書かれた史料を材料に過去の事柄を研究します。ですから、先行研究の叙述の根拠となった史料を読み、これを理解しないと真に歴史を考えたことにはなりません。日本史学の場合、当時書かれた古文書（こもんじょ）や日記を一次史料と呼び、これらを根拠とします（なお、後世に書かれた史料は二次史料と呼びます）。授業では、皇室の貞成親王の『看聞日記』や室町幕府のブレインであった僧侶満済の『満済准后日記』などを読み、解釈を提示してゆきます。こうした作業は、例えば4代将軍足利義持の政策決定や6代将軍足利義教のクジ引きによる選出に関する先行研究の叙述の検証であると同時に先行研究における思考の追体験でもあります。

この授業では、先行研究を参考にしつつ、一次史料にもとづいて考えることで研究者の思考を追体験してもらいたいです。受講生が「歴史を覚える」から「歴史を考える」へと向かうプロセスの第一歩になればと思っています。

教育学部

山崎 聡

## 学ぶ姿勢のエッセンス？

教養科目特集であるのに恐縮ですが、特にそれに限定せず、学ぶ姿勢とはどうあるべきか、について少々考えてみたいと思います。唐突ですが、精神科医にして作家の樺沢紫苑という方をご存じでしょうか。詳細は省くとして、氏曰く、学びによる自己成長の要諦は「input→output→feedback→input→…」(『学び効率が最大化するインプット大全』サンクチュアリ出版2019年参照)という螺旋運動であると。outputに当たるのは、昨今流行りの「アクティブ・ラーニング」で、要は、inputしたことを話し合ったり、プレゼンしたりすること。ですが、ここで重要なことはinput段階であり、つまり「outputを前提と(意識)したinput」です。樺沢氏によれば、inputしたことをoutputしない場合、それは全くといって良いほど自己成長には結実しません(もちろん、inputすることそれ自体に効用を見出すことは可能)。読書好きで、たとえ月に何十冊読破しようとも、outputを前提としない、それに至らない読書(input)は死蔵といえるかもしれません。

では、outputを前提としたinputとは何か。最もシンプルなのが、重要ないし疑問に思った個所に線を引く、メモを取る、適宜要約する等の能動的input。これが本格的なoutputなり、アクティブ・ラーニングなりにとって不可欠な素地となります。そうでないinputは、右から左に流れていくだけで、時間の徒費。本をどれだけ読んでも果実は儂く、また、アクティブ・ラーニングもお座なりに終わるかもしれません。

これは、講義参加の姿勢にも至極当てはまると感じます。近頃は、講義時に、配布物等を充実させるといったサービススタイルが拡大しつつあり、受講生は、充実した配布物を読めば、大体の内容が掴めるようになってきているケースも少なくありません。結果どうなるか？受講生は、ただ講師の話を「聞く」だけ。配布物に書いてあるからもうよいのか、アンダーラインを引く、メモを取るといったことを殆どしません。これが先に述べた「outputを前提としないinput」に当たります。学ぶ姿勢とはどうあるべきか、に関してこの拙いエッセイが一助となれば幸いです。

## 『教養科目の効』

「Study Nature、not Books」自然科学の世界に半歩でも深入りした人は、アガシーのこの言葉を聞いたことがあるでしょう。はて？初めて聞いたぞ、という人でも、その言わんとするところは分かりますよね。「本ではなくて、自然を学べ」あるいは「経験主義であれ」とも読めます。対して、私の大学院生時代の師匠(指導教授)の師匠のそのまた師匠の丘英通は、学生に「Study Books」と話したとのこと。この言葉の背景を紹介すると、丘先生は「ウミユスリカ」という海産昆虫の面白い生殖行動を海外の書物の中で目にしたそうです。その後、丘先生がフィールドワークでよく通っていた海にも、そのウミユスリカがいたことに気が付き、しかもそれは日本近海での初めての発見だったというお話です。丘先生は「読書の効」と題した執筆の中でこの経験にふれ、ウミユスリカの知識を事前に書物から得ていなかったとしたら、果たして自分はウミユスリカの存在に気がつくことができたでしょうか？(おそらく気がつかなかっただろう)と問うています。先人たちの知識の蓄えを書物から得ることで目の前にあるものの見方、見え方が違ってくるといことです。

さて、皆さんが履修した教養科目あるいはこれから履修する教養科目は皆さんの人生にどう役に立ってくれるのでしょうか？ ついつい、たかが教養科目と軽んじている人はいませんか？誰の人生にも素敵な出会いが用意されています。ここで言う出会いとは、あらゆる経験のきっかけという意味です。残念なことに、用意されている出会いの数は皆平等ではないかもしれない。けれど重要なのは、素敵な出会いをキャッチするアンテナがその人に立っているかどうか、ということでしょう。アンテナの数が多ければ、アンテナの型も色々な形を持っていた方が、自分で気が付ける出会いは増えるのです。教養科目の履修はそのアンテナを立てる作業、そのように思うわけです。(ああ、20年前の自分に、この記事を読んで欲しい、)おしまい。



理工学部

砂長 毅





農林海洋科学部  
農林資源環境科学科

松本 美香

## 教養科目は高知大学の学びを満喫するための扉

在學生は身に染みて、新入生はじわじわと実感していると思いますが、高校までと違って、大学生にはかなりの自由な選択が認められています。これは、皆さんが自分自身で自分自身をどう育てていくか(キャリア形成力)を磨いていく機会を設けているためです。ただし、自由といっても履修科目には一定の縛りがあります。教養科目の履修もその一つですが、これについては新入生から以下のような相談を受けることがあります。

「選んだ学部で専門的なことをしっかり学びたいと思って入学したのに、どうして1年生では専門科目がほとんどなくて、教養科目をこんなに多く取らないといけないのでしょうか。」私の答えは、「教養科目は自分の土台をつくるための学びで、専門科目はその土台の上に積み上げていくものだから、色々な分野の知識を幅広く知っておくことが大事だと思うよ。」というものです。

専門外の幅広い知識は、多様な視点から物事を考えるための基礎になります。そして、専門の学びでの課題も、社会で出くわすほとんどの問題も、様々な視点で考える必要があるため、色々な分野の知識を浅くとも持っていることは、自分自身にとって強い武器になります。何より、未知の分野を自分だけで学んでいくには多くの労力が必要ですが、その分野の専門家から導入部分を学んでおけば、その後の学びも進めやすくなります。

主に朝倉キャンパスで開講されている教養科目ですが、物部キャンパスにある農林海洋科学部からも、教員のほぼ全員が年間1回以上の講義を担当しています。農林海洋科学部での学びは、人と自然との関わり合いの形に関する学びであり、近年世界的に深刻化する環境問題およびそれに関わる経済・社会問題、そしてその解決策を考えるものです。「持続可能な開発目標(SDGs)」が策定され、地球という有限の枠の中での人の在り方を人類皆で考える社会を目指す上で、農林海洋科学部の提供する学びはきっと皆さんの糧となるでしょう。農地と森林と海とどのように関わっていけばいいのか、学部を超えて一緒に考えていきましょう。

## ‘自分たちのキャリア’について

看護は私たちの身近にあります。そんな身近にある看護を学問として学び、これから自分たちが看護職者としてどのように歩んでいきたいかを考える授業において教養科目はとても重要です。今回は、その中の一部である‘自分たちのキャリア’について学生が考え取り組んだ内容をご紹介します。

まずキャリアを考えるにあたり、自分自身を知ることから始めていきます。これまでの出来事を振り返りどんなことに喜びや悲しみを感じてきたのか、また他者からどのように自分が見えているかをお互いに共有します。学生にとって改めて自分を見つめ直すことは新鮮だったのか、‘自分が知らない自分に出会えた！’など新たな発見が得られたようです。次に、将来活躍できる場について興味ある分野を調べ、全体で共有していきます。‘看護職’といっても活躍できる場は幅広く、漠然と‘将来は病院で働く’というイメージを持って入学してきた学生も、調べる中でより具体的に将来を考えるきっかけになったのではないのでしょうか。そして、実際に活躍している卒業生4人に‘自分たちのキャリア’について語ってもらい、働くことや結婚し子育てすることなど、これからのキャリアデザインのヒントになる話を聞くことで、自分の将来を明確にイメージすることに繋がったと思います。授業の最後では、「未来の私の提供価値宣言！」と題し、将来どんなことを届けるプロでありたいかを考えてもらいます。同じ‘看護職’でも学生それぞれ届けたいものは違っており、今回考えることで自分らしいキャリアを歩むための一歩目になったのではないのでしょうか。

大学生活、また社会に出た後も‘自分のキャリアは自分で創る’ことが求められてきます。本格的に将来を考え始める大学生活において、学ぶことと同時に、授業や大学での経験を通し、自分たちが目指す将来像に向けて有意義な大学生活を歩んでもらえたらと願っています。

医学部看護学科  
基礎看護学講座

下田 真梨子



地域協働学部

中村 哲也

## スポーツ文化論

私の担当するスポーツ文化論は、「日本の学生スポーツ」を主なテーマとして、中学から大学までの運動部やスポーツサークルについての歴史や社会学的な知識・考え方を紹介しています。

私が高知に赴任した時に開講して早5年。年々受講者数が増えていき、2019年度は200名を超える大講義に成長しました。学生にとって身近なテーマということもありますが、専門の話をも多くの学生に聞いてもらえるのは、教員冥利に尽きます。

この授業は学部の枠を超えて多くの学生が受講しますので、授業への興味・関心を引いたり、受講生の満足度を高めたりするために工夫していることがあります。講義スライドで画像・動画を多用する。講義資料を授業前にKULASにアップし、授業中にPCやスマホで閲覧をできるようにする。講義に関する質問を学生に発問し、展開にアクセントをつける。リアクションペーパーの内容を紹介したり質問に答えたりして、講義をインタラクティブにする。成績基準や最終レポートの問題・採点基準(ルーブリック)を初回のガイダンスで説明する、等々。

特に効果を実感しているのが、リアクションペーパーとルーブリックです。リアクションペーパーは、鋭い質問や質の高い感想を紹介し続けることで、回を追うごとにコメントの質が向上します。

ルーブリックは、5項目5段階の25点満点で最終レポートの採点に使っています。初回授業で公表・説明することで、学生が自ら努力するようになりますし、中には私が驚くほどの入ったレポートもあります。大量のレポートを採点する際の評価基準のブレを防ぐことにもなります。何より、普通に採点すると約200名の受講生の成績がほぼ正規分布になります。

講義の工夫には手間も時間もかかりますが、慣れてしまえば意外と労力の負担はそれほどでもなく、むしろプラスの効果のほうが大きいのではないかと感じています。

## グローバルコミュニケーション

「グローバルコミュニケーション」は、平成29年度に語学力の向上や国際感覚の涵養を目標に共通教育教養科目として開講しました。3年目となる令和元年度は、海外研修先別(オーストラリア、フィリピン、マレーシア)に題目を設け履修者を募集し、計17人の学部生が海外研修に参加しました。

いずれの研修先も語学学校に通って英語を学ぶという共通点がありますが、それぞれ特色があります。例えばオーストラリア(ブリスベン)では現地の家庭に滞在しながら日常生活の中でネイティブの英語に触れられます。フィリピン(セブ)では合宿形式で朝から晩まで個人レッスンを受けます。3食、掃除・洗濯サービスつきなので、英語学習だけに没頭できるように配慮されています。マレーシア(クアラルンプール)では集合住宅を借りての生活となりますが、オーストラリアとほぼ同等のコースを半額以下で受講できます。また元試験官によるIELTS対策講座を行っている学校もあります。

今年度最も人気が高かったのはマレーシアのプログラムで、計13人が参加しました。4月に開催した説明会の時点では、マレーシアで英語を学ぶという事に不安や疑問を抱いている学生も多かったようですが、教育レベルの高さ、治安の良さ、そして参加費の安さが決め手だったようです。

マレーシアではインターナショナルスクールの数が増加し、海外の大学が分校を設置するなど現在国際社会から注目を集めている国の一つです。今回高知大生が通った語学学校のクラスも日本ではあまりお目にかかることのない中東や中央アジアなどから英語を学びにきた生徒で溢れかえっていました。

海外は怖い、英語は話せないと思っていた参加者が不安を抱えたまま渡航しました。1~2ヶ月海外で生活し、帰国後に英語力が伸びているのはもちろんのこと、Instagramが多国籍になったと大喜びし、次は交換留学を検討しているなどという話が聞けるのは、本プログラムを企画した教員にとっても非常に嬉しいことです。



土佐さきがけプログラム  
国際人材育成コース

柴田 雄介

# 自己点検・自己評価部会

共通教育主管  
近藤 康生

受講生の皆さんは、どのような目的を持って共通教育の授業を履修しているのでしょうか？卒業のために単位修得が必須である初年次科目はさておき、教養科目についてはかなりの選択の自由があるので、その選択は受講生の意識が反映されます。「単位が取りやすそうだから」という理由で、受講科目を決めることもあるかもしれません。しかし、安くはない授業料を払い、貴重な時間を費やして受講するわけですから、〇〇について学びたい、という目的があることと思います。これが教養科目選択の目的であるのが本来の姿です。また、就職や進学のためには、単に卒業するだけでなく、できるだけ良い成績を取って卒業したい、と考える人も多いでしょう。しかし、良い成績を取ることは結果であって、これが目的になると、良い成績を取りやすい授業を選ぶ、等、さまざまの歪みを生じます。この意味では、履修した科目の成績はあまり気にしない方が良いのかもしれませんが。選抜を目的とする入試と違い、授業評価の目的は着実な学びをサポートしていくことにあると言えるでしょう。

一方、授業を担当する教員には、公正で公平な成績評価が求められます。恣意的な評価を行わないのは当然ですが、特別な理由無く、極端に甘い、あるいは厳しい評価を行うことも問題です。本学では、共通教育だけでなく、専門教育も含め、公正で厳格な成績評価のためのガイドラインを作成して、この問題に取り組んでいるところです。

共通教育自己点検・自己評価部会では、ここ数年、「5週目15週目授業アンケート」と「アクションプラン」(アンケート結果に基づいた改善授業を実施)を実施し、その結果を分析してきました。その結果、アクションプランを実施した授業では、顕著な改善結果が明らかとなっています。

例えば、28科目について実施された平成29年度のアンケート結果では、「この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか」との問いに対して、5週目では8割超、15週目では9割超の肯定的回答(「はい」または「どちらかというとはい」)が得られています。この結果は、アンケートを実施した授業では、5週目のアンケート結果をもとに、担当教員が適切に軌道修正を行っていることを示しています。こうした傾向は、他の質問、例えば、「この授業で教員は、受講生にわかりやすい授業をするように努めていると思いますか」、「この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか」等でも同様の結果となっています。

また、平成30年度でも同様で、5週目と15週目のデータが揃っている17科目のうち12科目(71%)で改善傾向が認められています。

もっとも、5週目と15週目で評価が拮抗していたり、改悪しているように見えたりする科目でも評価(肯定的回答の割合)がもともと非常に高く、改善の余地がほとんどない場合が多いのも事実です。以上のことから、もともと評価の高い授業で授業アンケートが実施され、さらに改善されていることがうかがえます。つまり、現在行っている授業アンケートは、学生評価の高い授業をさらに良くする点では効果をあげている、のかもしれませんが。こうした点から、今後はより幅広くアンケートを実施していく必要があります。本学ホームページの共通教育のサイトには、年度ごとの報告書が公表されていますので、興味のある人はぜひご覧ください。

ただ、私たち教員が授業で手応えを感じるのは、こうしたアンケート結果もさることながら、授業中、あるいは、授業後に直接、質問に来てくれることです。教員が忙しそうだから、などと遠慮せず、どんどん直接話しかけて共通教育担当教員とも交流してみてください。





## 退任に当たって

共通教育主管 近藤 康生

最近、興味あるデータを見る機会がありました。それは、平成30年度卒業生に対して、令和元年12月からこの1月にかけて行われたアンケートの結果で、360名(34%)からの回答に基づいたものです。「大学で受けた教育や学生生活支援、施設などについてあなたはどの程度満足していますか」との設問に対して、共通教育科目全般に対しては、「満足だった」は25%、「どちらかという満足だった」は55%、合計した肯定的回答は80%という結果でした。この数値は、専門科目全般についての肯定的回答の91%には及びませんが、専任教員が全くいない中で実施されている本学の共通教育としては、高い数値であると感じました。これもひとえに、専門教育、また、研究や地域貢献の活動でご多忙の中、授業を担当して下さった先生方の献身的なご努力の賜である思います。

共通教育主管として共通教育の管理・運営に携わってきたこの4年間、授業を担当して下さりました教員の皆様、授業に積極的に参加してくれた学生の皆さん、また、共通教育の運営にご尽力いただいた事務職員の皆様に心よりお礼申し上げます。



改修工事の終わった共通教育2号館

## 編集後記

第68回中国・四国地区大学教育研究会が今年高知大学で開催されます。テーマの中心として大学教育における教養科目の意義が検討されることになっています。学生の皆さんも「専門」と「教養」とで何が違うのか、と一度くらいは考えたことがあるでしょう。今回の特集を好機に、再度各自で教養科目の意義について洞察を深められることを期待します。(P)

高知大学共通教育広報誌  [ハイライン]  
PipeLine No.55

発行 / 高知大学共通教育実施委員会  
編集 / 共通教育実施委員会広報部会  
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1  
☎088-844-8168(学務課全学・共通教育係)

発行日 / 2020年3月  
制作 / (有)西村謄写堂

広報・記事についてのご意見をお待ちしています。  
Mail : [gm06@kochi-u.ac.jp](mailto:gm06@kochi-u.ac.jp)